

辞世拾遺

私がこれまで目にした新聞（朝日新聞が多い）、雑誌、書籍の中から拾った辞世です。普遍性があると思われる遺書、遺訓も併せて載せてあります。辞世はその人の生涯、人となりを凝縮したものだと思われ、感ずる次第です。

秋田 実

渡り来て うき世の橋を眺むれば さても危うく過ぎしものかな

芥川竜之介

わたしは勿論失敗だった。が、わたしを造り出したものは必ず又誰かを作り出すであろう。一本の木の枯れることは極めて区々たる問題に過ぎない。無数の種子を宿している、大きい地面が存在する限りは。

水漬や 鼻の先だけ 暮れ残る（これが辞世だという説も）

朱楽漢紅（あけらかんこう）

執着の 心や娑婆に 残るらん 吉野の桜 更科の月

浅野内匠頭長矩

風さそう花よりもなお我はまた春の名残りをいかにせん
あらたのし 思いははるる 身はすつる うきよの月にかかる雲なし

朝比奈隆

戒名は不要。私は死んでも朝比奈隆

足利義輝

五月雨は 露か涙か ほととぎす わが名をあげよ 雲の上まで

穴風外慧薫

死出の旅 どこまで行くも 同じこと ちよつとこらで 死んでみようか

新井直之

幕がおりにゆく

寂しいという思いと、これが人生さという思いとがある。

在原業平

つひに行く 道とはかねて聞きしかど きのふけふとは 思はざりしを

有間皇子

家にあれば 筥に盛る飯を 草枕 旅にしあれば 椎の葉に盛る

淡谷のり子

唄ありて喜びあり 唄ありて涙をながす
我が生けるを ただ唄にのみ知る

安藤広重

(辞世)

東路に筆をのこして旅の空 西の御国の名どころを見ん

(遺書)

古歌

我死なば 焼くな埋めるな 野に捨てて 飢へたる犬の 腹をこやせよ

この心持にて手かるく野辺送りいたし申すべし。江戸市中の住居ゆえ 近所に捨てるような野もなきゆえ 寺へやりて埋めて貰うばかり。

必ず見栄やかざりは無用也。湯灌もいらぬ事なれども 世間の習いゆえ ほんの真似事ばかりさつと水をかけおくべし。寺へ持ち行き 穴へ納むれば 桶でも瓶でもふたを打わり上から押込むゆえ、きれいに洗てやるなどと手数を懸けるは誠にむだな骨折りゆえ、決して御無用也。

頭はかねて坊主ゆえ こうずりもまねばかりでよし。 但し戒名は是非院号付きにいたすべし。尤も金子は寺にて振合いを聞候て差し出す可く申す事。

吝嗇は悪し。無駄は省くがよし。通夜の御人には御馳走いたすべし。

寺は浅草東岳寺へ納むべし。葬式は武家の風にしたすべし。但し様子次第では無抛人ばかりにて 夜分こっそり極内葬にいたしおいて、出しても出さぬでもよし。極内葬なら武家風も何もいらず、荷いでよし、置きおいて本葬と披露いたし 寺で出す蒸物は出すべし。

石川五右衛門

石川や 浜の真砂は尽きぬとも 世にぬすびとの 種はつきまじ

伊勢戸左一郎

わが身にも 二〇〇〇年問題 持ち上がり

板垣退助

板垣死すとも 自由は死せず

市川団蔵三代目

けふも夢 寝ても起きても 夢の夢 夢に夢見る 夢の世の中

一ノ瀬泰造

友に

もし、うまく地雷を踏んだら、サヨウナラ!

母に

好きな仕事に命を賭けるシアワセな息子が死んでも悲しむことないヨ、母さん

一休宗純

生まれては 死ぬるなりけり 押しなべて 釈迦も達磨も 猫も杓子も
世の中は 食ふて糞して 寝て起きて さてそのあとは 死ぬるばかりよ

一遍上人

(辞世)

一代の聖教 尽き果てて 南無阿弥陀仏と なりはてぬ

(遺言)

わが化導は一期ばかりぞ(私が説教するのは、生きている間だけ、私が死んだらすべてを捨てよ)

没後のことは、わが門弟におきて葬礼の儀式ととのふべからず。野にすててけだものにほどこすべし

伊藤篁秋

一生を一夢といえど七十路に見残る夢のまだまだあるかな
世はなべて儂きものと知りながらなほ儂きに倚(よ)りて生きゆく

伊藤柏翠

夕牡丹ほどの夕日を賜りし

稲垣光夫

二十有三寂秋

ひつかぶる 夜寒の床の 泪かな

犬養毅

話せばわかる

井上靖

死は「大きな大きな不安だよ、君。こんな大きな不安には誰も追いつけっこない。僕だって、医者だって、とても追いつくことはできないよ。」

「僕はどうしたらいいかわからない。本当にどうしたらいいのだろうかね。」

伊能忠敬

家訓心得(遺訓)

1 孝は忠義の根本に候 親の言に従い家事を治め子孫長久を心がけ候儀第一に候 とかく質素に ゆくゆく諸商売を相休み……(続く)

猪熊功

死ぬも地獄 生きるも地獄

井原西鶴

人間五十年の究まり、それさへ我にはあまりたるに、ましてや

浮世の月 見過ごしにけり末二年

(人生五十年というが、それをさらに二年も超えて浮世で楽しませてもらい、ありがたかった)

岩本栄之助

その秋を 待たで散りゆく 紅葉かな

上杉謙信

一期栄花一盃酒 一期の栄華は一杯の酒

四十九年一睡夢 四十九年は一睡の夢

生不知死亦不知 生を知らずまた死をも知らず

歲月只是如夢中 歲月はただこれ夢の中の如し

極楽も 地獄も先づは 有明の月の心に かかる雲もなし

歌川豊国三世

一向(ひとむき)に 弥陀へ任せし 気のやすさ ただ何事も なむ阿弥陀仏

宇都宮徳馬

核兵器に殺されるよりも、核兵器に反対して殺される方を、私は選ぶ。

梅原竜三郎

生者は死者に煩はされるべからず。葬式なんぞする勿れ

江上波夫

夢あるところに希望あり

江国滋

おい癌め 酌（く）みかはさうぜ 秋の酒

江藤淳

心身の不自由は進み、病苦は堪え難し。去る六月十日、脳梗塞の発作に遭いし以来の江藤淳は形骸に過ぎず。自ら処決して形骸を断ずる所以なり。乞う、諸君よ、これを諒とせられよ。

平成十一年七月二十一日

遠藤周作

死は終わりじゃないんだ。必ずまた逢える。

私を含めた年寄りの最後の仕事は、子供や孫に自分の死に方を見せることだと私は常々思っています。

お市の方

さらぬだに うちぬる程も 夏の夜を 別れをさそふ ほととぎすかな

遠藤征慈

紫陽花（あじさい）の色褪せる日も遠からじ 酷暑は燃え来し命奪わん

大内義隆

討つ人も 討たるる人も 諸共に 如露亦如電 応作如是観

大熊長次郎

静かにぞ眠らせたまえ 人間の命死にゆく 時のおわりに

太田垣連月

願はくは 後の蓮（はちす）の 花の上に くもらぬ月を 見るよしもがな

太田忠夫

吾が骨は 戦友の沈みし海に撒け 太平洋戦の小さきピリオド

大田道灌

かかるとき さこそ命の 惜しからめ 兼てなき身と 思いしらすば

大津皇子

金鳥西舎に臨み
鼓声短命を催す
泉路賓主なく
この夕べ家を離れて向かう

百伝ふ 磐余（いわれ）の池に 鳴く鴨を 今日のみ見てや 雲隠りなむ

大高源吾

梅でのむ 茶屋もあるべし 死出の山

大村しげ

骨はのど仏を岐阜県の寺に、残りはバリの海に

大宅壮一

わたしは常々家族のものに、自分が死んでも坊主だけは呼んでくれるなど言っている。遺品は友人や弟子たちにあげるよう。膨大な蔵書は、一団体に所有されないで、マスコミ人が共有して利用できるものにしてほしい。

荻生徂徠

聖人死するときは、紫雲たなびくと聞けり。まだ出ないか、見よ、見よ。

荻野半之丞

ひとり旅 うき世をあとに 半之丞

奥村政信

東より ぬっと生れた 月日さへ 西へとんとん 我もとんとん

尾崎紅葉

死なば秋 露のひぬ間ぞ 面白き

七度生れかはって文章を大成せむ

尾崎放哉

春の山のうしろから 烟（けむり）が出だした

オストラポリア

死期が迫ったとき、酒を所望して

「死ぬ前には不倶戴天の敵とも和睦せざるを得まい」

男谷信友

受け得たる心の鏡かげ清くけふ大空にかへるうれしさ

落合直文

このままに 永くねぶらば 墓の上に かならず植えよ 萩の一むら

尾上菊五郎（六世）

まだ足りぬ 踊り踊りて あの世まで

尾上柴舟

死ぬといふ 一つのことを 思ふ時 あかるき国のひらけ行くかな

尾山篤二郎

死に急ぎするとばかりは思はずろ 其夜のうちと云ふこともある

海上春雄

死こそは正に人生の深淵にして 人たる者の心の中に常に留め置かる可き事とは言ひ乍ら 事に際してその決意を新にす可きこそ肝要ならん。

顧るに 吾この世に生を享けしより二十有余年 一つとして偉大なる天地万物の恩愛に浴せざりし事なく それに報ゆ可き何物も有せざりき。

吾 只吾が命の為にのみありし凡てのもののために 徒死を願はず 吾只に報恩の途を進まん。

昭和十八年十一月

海上春雄

父上様、母上様

元気で任地へ向かいます。春雄は凡ゆる意味でやはり学生でした。

快川和尚

心頭を滅却すれば火もまた涼し

貝原益軒

越し方は 一夜ばかりの 心地して 八十路あまりの 夢を見しかな

加賀千代女

月を見て われはこの世を かしくかな

香川景樹

一筋に いのちまつまの 春の日は かへりてながき ものにありける

学信和尚

いかばかり 楽しからまし 迎へらるる 花のうてなの 深き御徳は

勝海舟

コレデオシマイ

葛飾北斎

人魂（だま）で 行く気散じじや 夏原

加藤シヅエ

みんなに愛してもらって幸せです。

金田寛二

もう行け、もう行け

亀田鵬斎

今日は是限り

鴨長明

行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しく止まりたる例なし。朝に死に夕に生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。

柄井川柳

木枯しや あとで芽をふけ 川柳 (かわやなぎ)

河口博次

マリコ 津慶 知代子 どうか仲良く がんばって ママをたす けて下さい

パパは本当 に残念だ きっと助かる まい 原因は分らない 今 5 分たった

もう飛行機 には乗りたく ない どうか神様 たすけてください
きのうみんなと 食事したのは 最後とは 何か機内で 爆発したよう
な形で 煙が出て

降下しだした どこえどうなる のか 津慶しっかり たのんだぞ
ママこんな事 になるとは残念だ さよなら 子供たちの事 をよろしく
たのむ

今 6 時半だ 飛行機は
まわりながら 急速に降下中 だ 本当に今迄 は幸せな 人生だった と
感謝して いる

川端康成

康成「あなたは飛行機に乗るのが好きですか。」

寂聴「え、嫌いではありません」

康成「ぼくも好きです。いつも乗っている時、この飛行機が落ちれば良いと思
っています。」

カント

Es ist gut.

菅野スガ

野に落ちし 種の行方を問いますな 東風吹く春の日を待ちたまえ

菊塙 (う)

隅田川 梅のもとにて 我死なば 春咲く花の 肥料 (こやし) ともなれ

北一輝

大輝よ、此の経典は汝の知る如く父の刑死する迄、読誦せるものなり。

汝の生ると符節を合する如く、突然として父は靈魂を見、神仏を見、此の法華経を誦持するに至れるなり。

即ち汝の生るとより、父の臨終まで読誦せられたる至重至尊の経典なり。父は只此法華経をのみ汝に残す。父の想ひ出さるる時、父の恋しき時、汝の行路に於て悲しき時、迷へる時、怨み怒り悩む時、又楽しき嬉しき時、此の経典を前にして南無妙法蓮華経と唱へ、念ぜよ。然らば神靈の父直ちに汝の為に諸神諸仏に祈願して、汝の求むる所を満足せしむべし。

経典を読誦し解脱するを得るの時来らば、父が二十余年間為せし如く、誦住三昧を以て生活の根本義とせよ。即ち其の生活の如何を問はず、汝の父を見、父と共に生き、而して諸神諸仏の加護、指導の下に在るを得べし、父は汝に何物をも残さず、而も此の無上最尊の宝珠を留むる者なり

昭和十二年八月十八日

父 一輝

北村季吟

花も見つ 時鳥をも 待ち出でつ この世後の世 思ふことなき

木戸孝允（桂小五郎）

西郷、もういい加減にせんか

木下長嘯子

つゆの身の きえてもきえぬ おき所 くさ葉のほかに 又もありけり

桐生悠々

こほろぎは 鳴きつづけたり 嵐の夜

空海

止乎止乎（やみねやみね）。不用人間味（にんげんのあじをもちいず）

空也上人

極楽は 遙けきほどと 聞きしかど つとめて至る ところなりけり

草間しめ

死なば夏 花野の露にそぼぬれて 草間のむしに なき送らるる

楠正成（子正行に）

汝成長して三宝を敬せざることなかれ。色に耽ることなかれ。君臣の礼を乱すことなかれ。諸民を勞すことなかれ。軍法を心とせざることなかれ。此の期の大意を堅く守りて、天下に名を挙ぐる、これ汝が第一の孝行たるべし。

楠木正行

かえらじと かねて思へば 梓弓 なき数に入る名をぞとどむる

楠木正成、正季兄弟

七生報国

久保田万太郎

湯豆腐や いのちのはての うすあかり

栗原安秀陸軍中尉

昭和11年7月初夏の候、我等青年将校十数人、怨みを呑んで銃殺される。

我等は、従容として死途につくものである。世人は、或いはこれを見て、天命を知って刑に服したとするかもしれない。しかし、断じてそうではない。

私は万魁の怨みを呑み、怒りを含んで死んで行く。私の魂はこの地にとどまり、悪鬼羅刹となってわが敵を殺す。陰雨が降るときは、草葉の陰で火魂となって燃えてやる。これは私の悪霊である。私は断じて成仏しない。断じて刑に服したのではない。私は虐殺されたのだ。私は斬首されたのだ。

ああ、天はなぜ我等正義の士を葬り去ろうとするのだろうか。

そもそも今回の裁判は、その残酷にして悲惨なこと、昭和の大獄ではないか。

（口語訳）

黒田如水

思いおく言の葉なくて ついに行く 道は迷わじ なるにまかせて

黒田初子

お経より、皆でおいしいものを食べてちょうだいね

契沖

後の世の 猶又の世の 末の世も 生れて死なむ 人ぞ悲しき

袈裟御前

露深き浅茅が原に迷ふ身のいとど暗夜に入るぞ悲しき

小泉清

本日外出中

二十一日

幸田露伴

露伴「おまえはいいかい」

文 「はい、よろしゅうございます」

露伴「じゃあおれはもう死んじゃうよ」

河野健二

深淵を前にたじろぐ 蛙かな

大文字の 一朵（だ）の花となりゆくか

待つところ ただに咲き散る花なれど

後醍醐天皇

身は仮へ（たとえ）南山の苔に埋むるとも 魂魄（たましい）は常に北闕（ほくけつ、北の方京都のこと）の天を望まん

児玉忠次

君がため鎮台兵をきり殺し大江村にて腹切りにけり

小林一茶

盥（たらい）から 盥にうつる ちんぷんかん

小林慶子

唐突の 昇天あらん 唐突を あはれ希へり 老人われは

小堀遠州

きのふといひ けふとくらし enasuことも

なき身のゆめの さむるあけぼの

西行法師

願はくは 花のしたにて春死なん そのきさらぎの望月のころ

西郷隆盛

晋どん、もうここらでよかろう

西東三鬼

春を病み 松の根つ子も 見あきたり

斎藤道三

げにや捨てだに此の世のほかはなきものを、いづくかついの住みかなりけん

斎藤緑雨

僕〇月〇日を以て目出度死去致候間此段謹告仕り候

佐久間象山

時にあはば 散るもめでたき山桜 めづるは花のさかりのみかは

笹沢左保

運命、運命だよ。

真田幸貫

今や、外寇日に急に、大勢一変、皇政古に復する、また遠きにあらざらんとす・・・ああ、

予、天の明時を仰ぐことを得ず、空しく憂憤をいだきて死す

次黄坊樽次（茨木春朔）

南無三宝 あまたの樽を 呑みほして 身はあき樽に 帰るふるさと

式亭三馬

善もせず悪も作らず死ぬる身は、地蔵も笑はず閻魔叱らず

慈鎮

七十(ななそじ)の 山の端にこそ なりにけり 西へのみ行く 夜半の月影

十返舎一九

此世をぼどりやお暇に線香と、共に終には灰左様なら

司馬江漢

世の中は 市の仮屋の ひとさわぎ 誰も残らぬ 夕暮れの空

シーボルト

余は美しき国、平和な国に行かん

柴田勝家

夏の夜の 夢路はかなきあとの名を 雲井にあげよ 山ほととぎす

洪沢栄一

義と理と、何れの時か能く両（ふた）つながら全うせん。佳節に逢う毎に思い
悠然。

頭を回らして我が成事の少きを愧ず。流水、開花九十年。

島崎藤村の父

慨世憂国の志士をもって発狂の人となす。あに悲しからずや

島田つま

君とへし 吾が生涯に悔いはなし 明日の吾が身は如何にありとも

清水真帆

今日で入院して二年たった。ありがとう、ありがとう、ありがとう、ありがとう、
ありがとう、ありがとうと数えきれない程の人たちに、数えきれない程、い
いたい。

十返舎一九

この世をば どれおいとまに せん香と ともにつひには 灰左様なら

釈超空（折口信夫）

我々は 唯ぼうとして 居りしのみ かく後の世に 伝へおかんか

秋瑾

秋風秋雨、人を愁殺す

ジョー・デイマジオ

これでやっと、マリリンに会えるよ

聖徳太子

世間虚仮 唯仏是真

蜀山人

時鳥（ほととぎす） なきつるかたみ 初松魚（かつお） 春と夏の 入相の
鐘

昨日まで 人のことかと 思いしに おれが死ぬとは こいつたまらぬ

白洲次郎

葬式無用 戒名不用

親鸞

生死無常のことわり、くはしく如来のときおかせおはしまして候ふ上は お
どろきおぼしめすべからず候

須賀敦子の母

おまえは、遠いところにばかり、ひとりで行ってしまう

鈴木大拙

Would you like something, Sensei?という質問に対し、
No, Nothing, thank you.

千利休

人生七十（ジンセイシチジュウ）

力困希咄（リキイクトツ）

我這宝剣（ワガコノホウケン）

祖仏共殺（ソフツグセツス）

莊子

命長ければ恥多し

孫文

革命未だならず

平維盛

生れては遂に死すてふ事のみぞ 定めなき世に定めありける

平知盛

見るべき程の事は見つ。今や自害せん。

高杉晋作

おもしろき こともなき世を おもしろく

高橋とよ

私儀、このたび三月十四日にあの世へ疎開しました。この世に居りました間、色々とお世話になりましてありがとうございます。ご挨拶に伺いたい気持ですが、今度は「お化け」という名で行かねばなりませんので失礼します。

高浜虚子

この杖の 末枯野行き 枯野行く

沢庵禅師

全身を後ろの山にうずめて、ただ土を覆って去れ。経を読むことなかれ。齋(とき、酒食の席)を設けることなかれ。道俗問わず香典を受けることなかれ。衆僧は衣を着、飯を喫し、平日のごとくせよ。塔を立て、像を安置することなかれ。碑を立てることなかれ。諡号(おくりな)をつけることなかれ。木牌を本山祖堂に納めることなかれ。年譜行状を作ることなかれ。

竹久夢二

日にけ日にけ かつこうの啼く音
ききにけり かつこうの啼く音は
おほから哀し

太宰治(遺書の一節)

小説を書くのがいやになったから死ぬのです。いつもお前たちの事を考え、そうしてメソメソ泣きます。

太宰久雄

葬式無用。弔問供物辞すること。生者は死者の為に煩わさるべからず。

多田智満子

草の背を乗り継ぐ風の行方かな

橘広樹

ちよろづと　こそむすぶべき　黄金水　汲みかはすれば　泡と消えゆく

伊達太郎

伊達太郎　安達の倉は　見たばかり　今日はななきに　明日は極楽　（「ななき」は仙台藩の刑場）

田中絹代

セリフもしゃべれず、動くことができなくなっても、つとまる役はあるかしら
……

谷文兆

長き世を　化けおおせたる　古狸　尾先な見せそ　山の端の月

ダヌンチオ夫人

お願い、わたしにシャンパンを飲ませて。死ぬのが怖いんですもの。

種田山頭火

ぶすりと音をたてて虫は焼け死んだ。
焼かれて死ぬる虫のにはほひのかんばしく
打つよりをはる虫のいのちのもろい風

玉島雅行

お姉ちゃん、外出たら、火事が起きんようガスの元栓閉めなあかんで

田村実造

教え子を戦場に送ったという悔恨以外は、幸運と優れた方々との出会いに恵まれた生涯でした。

田村隆一

死よおごる勿（なか）れ

田山花袋

裕ちゃん、キーちゃん、正嗣君
立派な人になって下さい。

父上様母上様 幸吉はもうすっかり疲れ切ってしまって走れません。
何卒お許し下さい。
気が休まる事なく御苦勞、御心配をお掛け致し申し訳ありません。
幸吉は父母上様の側で暮しとうございました。

鶴見和子

生命細く 細くなりゆく 境涯に いよよ燃え立つ 炎ひとすじ

鄭泉

我死なば陶家の傍らに葬れ。百年の後、土に化し、酒壺に作られることもあろうから

寺井直次

作家は残った作品が勝負やさかい、よすけ（余計）なことに気をつこうな

地位とか名誉は、このよ限りのもんや。謙虚に生きんなんよ。一生懸命に仕事して、ほんで、いいんや。

寺山修司

私は肝硬変で死ぬだろう。そのことだけは、はっきりしている。だが、だからといって墓は建てて欲しくない。私の墓は、私のことばであれば充分。

暉峻康隆

さようなら 雪月花よ 晩酌よ

陶淵明

ただ恨む 在世の時に 飲酒 足らざりし

道元

五十四年第一天を照らす
箇の勃跳を打し大千を蝕破す
唳（いい、笑う）
渾身著くるに処無し、生きながら黄泉に陥つ

時実新子の夫

もうあんたにしてあげることにはなにもない。邪魔をしないことしか、してあげることはない

徳川家康

人の一生は重荷を負いて遠き道をゆくが如し。急ぐべからず。不自由を常と思へば不足なし。こころに望おこらば困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基、いかりは敵と思へ。勝つことばかり知りて負けることを知らざれば、害その身に至る。おのれを責めて人をせむるな。及ばざるは過ぎたるよりまされり。

慶長八年二月十五日

人はただ身のほどを知れ草の葉の露も重きは落つるものかな

わが命且つ夕べに迫るといへども、將軍かくおはしませば天下のこと心安し。されども、將軍の政道その理にかなわず、億兆の民艱難することあらば、誰にてもその任を代わるべし。天下は一人の天下にあらず。天下は天下の天下なり。たとへ他人天下の政務を取りたりとも、四海安穩にして、万民その仁恵をこうむらば、もとより家康が本意にして、いささかもうらみに思うことなし。

天和二年四月十七日

徳川光圀

いつの年の いつの月日の その時か 遂に我世の かぎりなるべき

戸田茂睡

猶めでむ 昔は老も 厭ひにき 月見るとても 幾ほどの世ぞ

豊臣秀吉

露とおき 露と消えにし わが身かな 難波のことも 夢のまた夢

返すがえすも秀頼のこと頼み申し候。五人の衆に頼み申し上げ候。委細は五人の奉行の者に申し渡し候。名残り惜しく候。以上

秀頼のこと成り立ち候ように、この書付を衆として頼み申し候。何事もこの他には思い残すことなく候。 かしく

八月五日

秀吉

家康（徳川）

筑前（前田利家）

輝元（毛利）

景勝（上杉）

まいる

永井荷風

余死するの時、後人もし余が墓など建てむと思幅、この浄閑寺の塋域（えいいき）娼妓の墓乱れ倒れたる間を選びて一片の石を建てよ。

中島三郎助

ほととぎす われも血を吐く 思ひかな
われもまた 死士と呼ばれん白牡丹

中村苑子

わが墓を 止り木とせよ 春の鳥

中江藤樹

思ひきや つらくうかりし 世の中を 学びて安く楽しまんとは

永岡鶴蔵

主義のため身命を賭する。一家の処分は次のように
四歳になる子は養女にやる
八歳の子は学校より戻りて菓子売りをなす
十三歳の子は朝夕の御飯炊きを引き受け通学す
十五歳の子は昼は機械場に労働し夜は甘酒を売る
妻は昼間停車場に出て荷物運搬をなし夜分は甘酒を売る

中野孝次

死はさしたる事柄には非ず 生ときは生あるのみ、死のときは死あるのみ

中野奎之助

惜しまるるとき散りてこそ世の中の花も花たれ人も人なれ

中村真一郎

薔薇と百合 匂へよみじ（黄泉路）の夕影に

夏目漱石

則天去私

風に聞け 何れか先に散る木の葉

「いま、死んじゃこまる。いま、死んじゃこまる。ああ、苦しい。ああ、苦しい。」

成石平四郎

先生、これまで良くしていただきました。僕も三十歳まで長生きをし、何事もせずに消えます。どうせこんな男は百まで生きて、小便たれ位が関の山ですよ。右は一寸この世の御暇まで。東京監獄にて成石平四郎 明治四十四年一月下旬（南方熊楠あての遺書）

西田幾太郎

我死なば 故郷の山に埋もれて 昔語りし友を夢みぬ

新田次郎

寒梅や 思い残して 西ひがし

乃木希典

うつし世を 神去りましし大君の みあと慕いて われはいくなり

野村望東尼

思ひおくこともなければ今はただ 涼しき道にいそがせたまへ

萩原井泉水

古希として みかんのあまきほか 思うことなし

白鯉館卯雲

食へばへる 眠ればさむる 世の中に ちとめづらしく 死ぬも慰み

間喜兵衛

草枕 むすふかりねの 夢覚めて 常世にかへる 春のあけぼの

ヴァージニア・ウルフ（入水自殺）

あなたのお蔭で私の一生は幸せでした。

長谷川町子

三つの頼みごと

密葬にしてほしい。入院させないでほしい。手術を受けさせないでほしい。

浜口与右衛門

月や雪 はなを友なる ひとり旅

バーナード・ショウ

自分の骨を妻の骨といっしょに粉にし、かきまぜて庭一面に吹き飛ばしてくれ

林子平

親もなく 妻なく子なく 版木なし 金もなけれど 死にたくもなし

原 阿佐緒

夜につづく 昼のごとくに うつそみの 夢につづける 死もあらばあれ

伴信友

今にはは なにをか言はむ 代の常に いひし言葉ぞ 我心なる

幡随院長兵衛

極楽へ 今日晴着の 麻袴 供をも連れて 死出の旅路へ 留め置かまし
大和魂

日野草城

かへりみて 長かりき 長からざりき

日野俊基

古来一句 無死無生
万里雲尽 長江水清

フェノロサ (Earnest Francisco Fenollosa)

帰りなん、いざ三井寺へ！ I want to go back to Miidera!

藤田豪之輔

嗚呼しんど ドッコイショウと もう何度 唱えれば死ぬ 吾が身なるらん

藤村操

巖頭の感

悠々たる哉天天壤、遼々たる哉古今、五尺の小軀を以って此大をはからむとす。
ホレーショの哲学、ついに何等オーソリチィを價するものぞ。万有の真相は唯
だ一言にして悉す。曰く「不可解」。

我この恨を懐いて煩悶、終に死を決するに至る。

既に巖頭に立つに及んで胸中何等の不安あるなし。始めて知る、大なる悲観は
大なる楽観に一致するを。

藤原道隆

濟時に朝光。やつ等も極楽にいるんだらう。では、あちらでまた一緒に飲むと
しよう。

フランク・シナトラ

もうこれで終わりか……

古楨重固（ふるまき しげかた）

死にともな あな死にともな さりとては あまりに君のご恩深さに

別所長治

今はただ 恨みもあらし 諸人の 命に代わる わが身と思へば

別所長治の妻

もろともに 消え果つるこそ 嬉しけれ 後れ先立つ 習いなる世を

北条時政

吹きと吹く 風な恨みそ 花の春 紅葉も残る 秋あらばこそ

北条時頼

業鏡高懸 業鏡（鏡をかける板？）高く懸く

三十七歳 三十七歳

一槌打碎 一槌に打碎すれば

大道坦然 大道坦然たり

細川ガラシャ夫人

散りぬべき 時知りてこそ 世の中の 花は花なり 人は人なり

細川隆国

絵に写し 石を作りし海山を 後の世までも目離 (か) れずぞ見む

細見綾子

門を出て 五十歩 月に近づけり

ホー・チ・ミン

私事について

大がかりな葬式で、人民の時間と金銭を浪費しないでほしい。

私の遺体は火葬にすること。衛生的にもいいし、土地も無駄にしないですむから。

灰は三つの陶器に入れ、ベトナムの北部、中部、南部のそれぞれの丘を選んで埋めてほしい。

堀河天皇

ただいま死なんずるなりけり。大神宮たすけさせ給へ。南無平等大会講明法華
……

苦しうたへがたくおぼゆる、いだきおこせ……

本田宗一郎

オレが死んでも交通渋滞の原因になるから、葬式は絶対にやってくれるな。

本多忠勝

死にともな ああ死にともな 死にともな 御恩を受けし 君を思へば

前田純高

いくとせの 前の落葉の 上にまた 落葉かさなり 落葉かさなる

正岡子規

糸瓜 (へちま) 咲きて啖のつまりし仏かな

痰一斗 糸瓜の水も 間に合はず

をととひの へちまの水も 取らざりき

マタハリ

この帽子似合うかしら（死刑寸前の言葉）

松井須摩子

（前略）舞台のいろはから仕込んで頂いた大恩あるお二方にそむいてまで○か
った其人に先立たれて何う思ひなほしても生きては行かれませぬ。伊原先生に
もくれ〜も願っておきましたが、あと〜の事何卒よろしくお願ひ申し上げます。
大変申し上げにくいのですが、何卒私の死がいをあのおはかに埋めて頂ける様お
骨折を願ひたうございます。

取りいそぎますので乱筆にて

坪内先生

御奥様

お許に

（夫の島村抱月急逝の2ヶ月後に縊死）

松尾芭蕉

この道や 行く人なしに 秋の暮
旅に病んで 夢は枯野をかけめぐる

松平定信

今はただ 何を思はん うきことも 悲しきことも 見果てつる身ぞ

松永安左衛門

五十、六十は鼻垂れ小僧。七十、八十働き盛り。九十になって迎えが来たら、
百まで待てと追い返せ

松本五平

新島先生のそばに眠りたい。

（同志社の名物小使）

マリー・ローランサン

恋人のアポリネールに「死んでも会いに来ないで」

マルセ太郎

人生が芝居なら、下ろされる幕を、僕はしっかりと見つめたい。

三島由紀夫

益荒男が手挟む太刀の鞘鳴りに幾年堪へて今日の初霜
散るを厭ふ世にも人にも先駆て散るこそ花と吹く小夜嵐

三波春夫

逝く空に桜の花があれば佳し

源実朝

出テイナハ主ナキ宿ト成リヌトモ 軒端ノ梅ヨ春ヲワスルナ

源具行

逍遥生死 四二年
山河一革 天地洞然

源頼政

埋もれ木に 花咲くことは なけれども 身のなるはてぞ あはれなりける

宮崎恭子（隆巴）

さんきゅう 三十九年間……一緒にやってきて 私面白かった 堪能した
おいしい人生をありがとう これからもずっと よろしく

宮崎弥蔵

御母上様 御兄上様
大丈夫（ますらお）の 真心込めし 梓弓 放たで死する ことのくやしき

宮沢賢治

方十里稗貫のみかも稲熟れてみ祭三日そらはれわたる
病（いちつき）のゆえにもくちんいのちなりみのりに捨てばうれしからまし

村山槐多

自分は、自分の心と、肉体との傾向が著しくデカダンスの色を帯びて居る事を
十五六歳から感付いて居ました。私は落ち行くことがその命でありました。是れ
は恐ろしい血統の宿命です。肺病は最後の段階です。宿命的に下へ下へと行く者
を、引き上げよう、ひきあげようとして下すった小杉さん、鼎さん其の他の知人
友人に私は感謝します。

たとへこの生が小生の罪でないにしろ、私は地獄へ落ちるでしょう。最低の地
獄にまで。さらば。

一九一八年末 村山槐多

森鷗外

遺言

余ハ少年ノ時ヨリ老死ニ至ルマデ一切秘密無ク交際シタル友ハ賀古鶴所君ナリ。コヽニ死ニ臨ンテ賀古君ノ一筆ヲ煩ハス。死ハ一切ヲ打チ切ル重大事件ナリ。奈何ナル官憲威力ト雖、此ニ反抗スル事ヲ得スト信ス。余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス。宮内省陸軍皆縁故アレドモ、生死別ルハ瞬間、アラユル外形的取扱ヒヲ辞ス。森林太郎トシテ死セントス。墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可ラス。書ハ中村不折ニ依託シ、宮内省陸軍ノ栄典ハ絶対ニ取りヤメヲ請フ。手續ハソレゾリアルベシ。コレ唯一ノ友人ニ云ヒ残スモノニシテ、何人ノ容喙ヲモ許サス。

大正十一年七月六日

森林太郎言

山片蟠桃

地獄なし 極楽もなし 我もなし ただ有る物は 人と万物
神ほとけ 化物もなし 世の中に 奇妙不思議のことは なおなし

山川登美子

おっとせい 氷に眠るさいはひ (幸い) を 我もいま知る おもしろきかな
父君に 召されていなむ とこしえの 春あたたかき 蓬萊のしま
わが柩 守る人なく 行く野辺の さびしさ見えつ 霞たなびく

山崎宗長

朝夕末期の希 (ねがい)、殊 (ことに) このごろは狂気におよぶまで……
ねが (願) はくは な (無) き名は たゝじ 我し (死) なば 八十 (やそじ)
あまりを 神もし (知) らじよ

山上憶良

士 (をのこ) やも 空しかるべき万代に 語りつぐべき 名は立てずして

結城昌治

辞世

書き遺す ことなどなくて すすしきよ
・所が、持ち直して、次ぎの句を作った。

まだ生きて ゐるかと思にも 刺されけり
遺言
通夜、葬式、告別式は、無用のこと

由比正雪

秋はただなれし世にさえものうきに長き門出の心とどむな

横山俊男

仏壇も墓も位牌もなきくらし死なばただちに風葬とせよ
わが骨は宙に撒かれて散り失せよ飛行自在の旅をせむかな

与謝蕪村

白梅に明くる夜ばかりとなりにけり
我も死して碑に辺（ほとり）せむ枯尾花

吉岡勇平

ほととぎす我を誘（いざな）い死出の山 独り行く身の友しなければ

吉田兼好

命長ければ辱多し。長くとも四十に足らぬ程にて死なむこそめやすかるべけれ

吉田松陰

身はたとひ 武蔵の野辺に 朽ちぬとも 留置かまし 大和魂

淀川長治

もっと映画を見なさい

読み人知らず

知らず 生まれ 死ぬる人 何方より来りて 何方へか去る
散る桜、残る桜も散る桜

頼三樹三郎

まかる身は 君が世思う真心の 深からざりし するべなるべし

ラディゲ

神の兵卒たちが俺を捕らえにやってくる

柳亭種彦

我は秋、六十帖を名残かな

良寛

形見とて 何残すらむ 春は花 夏ほととぎす 秋はもみじ葉

災難に会う時節には災難に会うが宜しく候

病苦に会う時節には病苦に会うが宜しく候

死ぬ時節には死ぬが宜しく候

是が是災難を免れる妙法にて候

冷泉隆豊

見よや立つ 煙も雲も 半天(なかぞら)に さそいし風の 音も残らず